

英語科における言語力を高める授業づくり

— 2種類の言語活動のつながりを意識した実践を通して —

山崎 学肖

広島大学附属東雲中学校 教諭

1. はじめに

我々の生活は言語使用により成り立っていると一言で言っても過言ではない。日常の行動や学習活動などほとんどすべての場面において言語を使って活動している。甲斐（2009）は「新学習指導要領において、『各教科等の指導に当たっては、児童の思考力、判断力、表現力等をはぐくむ観点から、基礎的・基本的な知識及び技能の活用を図る学習活動を重視するとともに、言語に対する関心や理解を深め、言語に関する能力の育成を図る上で必要な言語環境を整え、児童の言語活動を充実すること』と書いてあり、上の引用の『児童』が中学校においては『生徒』に置き換えられているだけであることを示している。このことは、9年間の義務教育では、各教科等をあげて『思考力、判断力、表現力等』の育成を重視すべきことが指摘されているわけである。この『思考力、判断力、表現力』は『言語力』という用語を具体的に説明した表現である」と論じており、これからの教育において言語力を高めることが求められていることを述べている。

言葉に関して言えば、日本全国でも方言のように日本語が様々な使われ方をしている。自分の体験談であるが、高校生まで18年間育

ってきた広島を離れ、6年間大学生生活を徳島県で過ごした。その時にも言葉（方言）の不思議さを考えたことがある。方言が「面白い」と感じるか否かは多くの意見があるだろうが、日本人が使っている同じ日本語でも様々な表現方法や表現形態があることを改めて実感した体験であり、言葉に対する見方が変わったことを実感した。

また、現代では若者（特に女子中高校生を中心に）が多くの言葉を創りだしている。これを取り上げて、「言葉が歪んでいる」などと批判する声も多く聞かれる。具体的に言えば、「ヤバイ」という言葉は使う状況によって違う意味をあらわす。美味しいものを食べた時の「ヤバイ」と何か失敗した時の「ヤバイ」は当然意味が異なるし、表現方法も違ってくる。

では、このような状況や心情を表した表現を創りだす若者たちは言語力が低いのだろうか？言語力とは何を示すことだろうか？言語力を高めるためには何が必要なのだろうか？これらの視点を中心にして、今回は英語科において言語力を高めるための言語活動を中心とした授業づくりを提案していきたい。

2. 言語力育成について

(1) 教育全体としての言語力育成について

前述したように、新学習指導要領では、国語科や英語科だけでなくすべての教科・領域において「思考力、判断力、表現力の育成」が重要となっており、言語力とはそれらの力を具体的に示した表現であることを確認した。さらにすべての教科・領域において言語活動を充実させることの必要性を謳っている。

言語力の考え方については、中央教育審議会・教育課程部会に設けられた「言語力育成協力者会議」における「言語力の育成方策について」でどのように育成すべきかが取り上げられている。そこには、「言語力とは、知識と経験、論理的思考、感性・情緒などを基盤として、自らの考えを深め、他者とコミュニケーションを行うために言語を運用するのに必要な能力を意味するものとする」と定義されている。また「言語で伝える内容が貧弱なものとなり、言語に関する感性や知識・技能などが育ちにくくなってきている。このため、言葉に対する感性を磨き、言語生活を豊かにすることが大変強く求められている。」という表現からは言語力育成の必要性を読み取ることができる。さらに、言語の果たす役割について①「知的活動に関すること」、②「感情・情緒に関すること」、③「他者とのコミュニケーションに関すること」の3つの側面から言及しており、これら言語の果たす役割に応じた指導の充実の必要性が述べられている。すなわち、言語力を育成するためには、これらの観点を重視し、言語の役割を意識した指導をすべての教科で行う必要がある。

(2) 英語科としての言語力育成について

「英語」という言葉そのものを扱う英語科において、言語力育成に関してはさほど驚く

ようなことでもないであろう。新学習指導要領にも英語科の目標として、「外国語を通じて、言語や文化に対する理解を深め、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り、聞くこと、話すこと、読むこと、書くことなどのコミュニケーション能力の基礎を養う」と明言されている。この「コミュニケーション能力の育成」という目標が我々英語教師には大きく、どのような指導を行えばよいのか迷う要因になっている。

新学習指導要領には続いて、コミュニケーション能力を育成するための言語活動が4つの技能ごとに設定されており、それらの具体的な例を参考にしながら授業を考える。しかしながら、その言語活動にも性質の違う言語活動があるということを押さえておかななくてはならない。1つ目は「言語材料について理解したり練習したりする活動」であり、これはパターンプラクティスに代表されるような機械的な練習で、英語の基礎基本を学習する活動である。2つ目は「実際に言語を使用して互いの考えや気持ちを伝え合うなどの活動」であり、この活動を通してコミュニケーション能力を育成する方針である。

さらに、平田ほか(2008)によると

「『理解させてから使用させる』という単線的な発想から脱却して、『使用の中で理解させ、さらに使用させる』という使用を中心とした双方向の指導が求められる」と述べている。このことから、現場の中学校ではかなり多くのコミュニケーション活動が授業の中で展開されてきた。しかしながら、2つ目の言語活動のイメージが強すぎて、1つ目の言語活動を軽視してしまう傾向があるように感じる。極端な言い方をすれば、「使わせておけ

ばいい」というような活動が多くなっているのではないか。それでは、学習指導要領が本当に意図することとは外れ、更に生徒に英語を定着させることができないだろう。

そこで、英語科として言語力を育成する上で必要な授業実践例を示すことで、これら2種類の言語活動をどのように指導していくかを示していく。

3. 実践例

(1) 実践例1

【どのように音読する？(中学1年生)】

中学1年生の教科書においては、ほとんどの内容が会話文で書かれている(本校はNew Horizon English Course Iを使用している)。この会話という形態は教材として非常に深い意味を持っていると考えている。なぜなら、会話文には必ず状況が必要で、その状況によっては同じ英語表現でも意味が変わってくるからである。そして、何気ない会話文でも、読み方によって少しイメージが変わってくるのである。

その具体例として、「Unit 4 日本大好き -Part 1 これは何-」を取り上げる。下に教科書の会話文を提示する。

Mike: What's this? Judy: It's a bird. Mike: That's right. What's this? Judy: I don't know. Is it an animal? Mike: Yes, it is. It's a rabbit. Judy: Really?
--

図1 教科書の会話文の例

このページでは疑問詞のwhatの導入・練習が期待される内容である。ほとんどの学校で

は、この内容を扱う時に、疑問詞をいかに練習させるか、いかに習得させるか、といったことに注意が集まると思う。しかしながら、教科書の内容を扱う時に考えないといけないことは、「この教材で何を教えることができるのか?」ということである。従来通りの疑問文の練習のみで終わってしまったら、この教科書内容の価値が低くなってしまふ。

そこで、疑問詞の説明と練習、そして内容理解を終えた後の音読練習で少し工夫を加えてみることを提案する。これまでの研究により、音読練習には様々な効果があることが示されている。土屋(2004)は、日本のような外国語環境における英語学習において音読は、スピーキングの基礎となる大切な練習と捉えている。それは、音読練習からスピーチや演劇など様々な活動に発展が可能だからである。また音読練習は、英語の基本的な読みを習得する練習の1つでもある。門田(2007)は、音読の効果として「単語認知の自動化機能」と「新規学習項目の内在化機能」の2つをあげている。これらの練習を通して、英語の基本的な読みに関する練習、つまり新学習指導要領で言えば「言語材料について理解したり練習したりする活動」をすることが可能なのである。

さらに音読について、新学習指導要領では「読むこと」の言語活動の例として、「(イ)書かれた内容を考えながら黙読したり、その内容が表現されるように音読すること」と明記されており、今回示す授業例は、この内容を目標とした活動である。この音読活動は、これから重視される「英語を活用する力」の1つの要素であると考えられる。ただ、記号としての文字を音声化するだけではなく、状況や

人物の心情に合わせて音読する機会を増やすことで、生徒の言語に対する関心を引くことができ、言語力を高めることができる。と考える。

今回取り上げた教材で具体的に考えてみると、例えば最後のJudyの発話に注目してみると。この会話文では、折り紙をつかってMikeがJudyにクイズを出している設定である。Mikeの作ったウサギの折り紙を見て、最後に「Really?」とJudyが発言するのだが、この1文（厳密に言えば1単語であるが）をどのように読むかによって、Judyはどんな性格の持ち主なのか少し理解できると考える。

これを考える時には、2つの答えがあるのではないと思う。1つは、普通のテンポで最後を上げ調子で読む場合である。この読み方だと驚きを表す「本当に?」という意味になる。そうすると、Judyは素直でいい子であるという解釈につながってくる。2つ目は、少しゆっくりで最後を上げ調子で読む場合である。この場合は少なくとも1つ目の状況とは異なることが分かると思う。この場合だと、少し疑いの気持ちを持ちながら「本当に?」と言っている。このことからJudyは少し疑い深い女の子ではないかと推測できる。このように、1文ないしは1単語でも読み方を考えることによって、会話の状況、登場人物の心情がイメージしやすくなるのではないかと考える。

この考え方は日本語でも同様である。つまり、日常生活で自分たちが使っている言葉をイメージしながら、当てはめてみることでこの会話を自分だったらどう読むのかということを考えさせることができる。このように音読を少し工夫するだけで、今まで学習した内

容を膨らませることができ、生徒にとって言葉を使って考えさせる良い機会を与えるのではないかと考える。

(2) 実践例2

【どのように音読する? (中学2年生)】

次の例も、前述した内容と同じ音読に焦点を当てた指導の1つである。今回は中学2年生を対象とし、内容としては接続詞 (if, that, when, because) を学習した後の復習の活動として位置付けた。

Mike: Hello, Emi. What are you going to do on Sunday?
 Emi : I'm going to go shopping if it is sunny. But if it is rainy, I'm going to watch TV at home.
 Mike: Oh, great! May I go shopping with you?
 Emi : Well, I think that it will be rainy on Sunday.
 Mike: Oh, really? I hope that it will be sunny on Sunday.
 Emi : I think so, too.

図2 自作の会話文例

図2に示した会話は教科書に掲載されてある内容ではないが、接続詞を使った文章を正確に読み取ることができるかどうかを確認するために用いた。

授業の手順としては、音読をする前に内容理解を行わないといけない。内容を正確に理解していないと適切な音読をすることができないのである。正確な内容理解を行う際に、まず生徒に「この会話をまとめるとどのような内容になる?」と問いかけた。この問いかけは、かなり唐突で生徒にとってはハードルが高いように思われたので、この発問をした後に、「会話の内容をまとめるときに、『〇〇

だけど、△△だ。』のような形式でまとめられるように考えてみよう。」と補足した。この補足をした後に生徒に考えさせる時間を取り、答えを全体で確認した。

この会話文が面白いのは、答えが必ずしも1つではないということである。実際に、生徒の答えも2種類に分かれた。1つ目は、「MikeとEmiは日曜日に晴れたら買い物に行くが、雨になりそうなので行けそうにない」という答えである。この答えは、会話内容を正確に読み取っている。しかしながら、これだけでは、この教材の価値としては少し物足りないと考える。英語を文字通り読んで理解することは大切な力であるが、言語力といった場合に、主体的にテキストを読み取る「読解力」という力に焦点を当てると次に示す2つ目の答えも考えられる。

2つ目の答えは、「MikeはEmiと一緒に買い物に行きたいが、Emiはあまり行きたくない」である。この会話文の中には、どこにも『EmiがMikeと買い物に行きたくない』という記述はない。ではなぜこういう答えに至ったのであろうか？生徒にこの答えの理由を聞くと、「2番目のEmiの発話の"Well"という言葉で、Emiはためらっている様子が分かる」と答えた生徒が多かった。Mikeが"May I go shopping with you?"とたずねた後の受け答えとしては、例えば"All right. / OK."などの答えが予測されるがこの場面ではその答えがない。つまり、はっきりとではないがこれらの答えがないということは、遠まわしにEmiは断っていることが分かるのである。このように、文字通りの理解から状況・心情を読み取る段階に行くことが大切なのである。

では、この2つの答えの違いは次にどこに

活用できるのかと言うと、Emiの最後の発話である"I think so, too."という表現に関わってくる。1つ目の読み方でいけば、EmiはMikeと買い物に行くのにあまり抵抗がないので、「確かにそうだよね」という意味合いを含めて、うなずきながら読むことができる。しかし、2つ目の読み方でいけば、Emiは遠まわしに行きたくないことを伝えるわけであるから、少し戸惑ってつまりながら「ああ、そ、そうだね」のように読むことが適切であろう。このように読む場合、『表情はどうすればいいのだろうか』という問いを生徒に投げかければ、面白い意見も返ってくる。

Mikeについても言及すれば、MikeはEmiと一緒にいきたいという意思を"I hope that it will be sunny on Sunday."という1文で読み取ることができる。つまりMikeはEmiのことが気になっている（もしくは恋心を抱いている）状態なのであろう。これで、2人の心情や状況が確認できると、後は生徒が自ら他の文章をどのように音読すればいいのか考えて練習をする。教師として生徒の言語力を高めるためには、生徒にいかにか考えさせるかということと、どこまで教えるのかという意図を教師が明確にもたなければならぬのである。

(3) 実践例3

【言語技術を活用した指導（中学2年生）】

今まで2つの授業例を示してきたが、2つとも「読むこと」に焦点が置かれた内容であった。最後の例として「読むこと」ではなく「書くこと」を中心にした指導例を提示する。この実践例は本校の松村教諭の実践であるが、今回は本人の了承を得て掲載することができ

た。

「書くこと」は4技能においても一番難しく、生徒にとっては気の進まない活動であるように思われる。広島県で行われている中学2年生を対象とした「基礎・基本定着状況調査」においても4技能の中で「書くこと」が一番低い通過率であった。しかし、学習指導要領においては、4つの技能を総合的に育成する指導を充実することが方向づけられている。直山（2009）は「自分の思いを相手に深く理解してもらうために言語力を身につけさせるためには、『書く』活動が大変重要である。」と「書くこと」の重要性を述べている。

このように生徒にとっては難しいがとても重要な「書くこと」についての指導を示すことにする。特に「書くこと」の指導において「言語技術」を活用した指導実践例である。「言語技術」とは、論理的に思考したり、コミュニケーションをとったりするための技術である。三森（2002）によると、欧米の母語教育では言語技術が中心となっており、日本人が英語を学習するにあたり、日本語で言語技術を学習することは有効であるとされている。日本人の英語学習者にとって母語の日本語と英語には構造上の違いが多く見られ、この違いが習得をより難しくさせている。日本語の特徴としては、①一人称の主語が省略される、②理由が先行する、③主張や意見が最後に来る、であり英語とは全く逆の構造を有している。これらの違いを理解し、英語を効率的に学習する一つの方法が「言語技術」である。

今回の指導手順としては「言語技術」の1つである「問答ゲーム」を活用した指導から始まる。このゲームをする目的としては、英

語に速やかに移行できる日本語のコミュニケーション・スキルを獲得させること（三森 2003）である。いきなり英語を使っただけの問答ゲームは難しいので、日本語を用いた「問答ゲーム」から始めた。

図3と図4はそのゲームの内容を少し示したものである。このゲームは最初に口頭で行うことにより、「話すこと」にもつながる指導の1つであると考えられる。そして「話すこと」から「書くこと」につなぐ活動としても機能する。これらのゲームを活用していけば英語の言語力を培うことも可能である。実際に、この活動を行った生徒の感想を示す。

<生徒のコメント例>

- ・いつも日本語の語順で英語を書こうとしていたので、うまく書けなかったけど、問答ゲームで「誰が」「どうする」を意識して書くようになった。
- ・文を書く時に、主体が誰なのかを考えるようになって、前よりも文がうまく書けるようになった。
- ・言いたいことを最初に言って、理由をそのあとにつける形は、英語以外でも活用できるので、よかった。

これらの感想から分かるように、このゲームは日本語と英語の違いを理解した上で、英語の言語力を伸ばすことに有効な活動である。また、この指導を終えて生徒にライティング課題を与えたところ、指導以前の作品と比べると、自分の伝えたいことがより明確になっており、そして分かりやすく整理された表現になっていることが分かった。生徒の言語力を高めていくためには、このような地道な努

質問する人	答える人
あなたは〇〇が好きですか?	好きです。
誰が〇〇が好きですか?	私が〇〇が好きです。 ※主語(～は、～が)が誰なのか、何なのかを明確にしよう。
なぜあなたは〇〇を好きなのですか?	好きな理由は2つあります。1つ目は、〇〇は面白いからです。2つ目は、〇〇はワクワクするからです。 ※理由は2つ以上言いましょう。理由に番号をつけることをナンバリングと言います。ナンバリングを利用しましょう。
今言ったことをまとめて言ってください。最後にまとめの文を言ってください。	私は〇〇が好きです。理由は2つあります。1つ目は、〇〇は面白いからです。2つ目は、〇〇はワクワクするからです。だから、私は〇〇が好きです。

図3 問答ゲーム (日本語バージョン)

質問する人	答える人
Do you like ○○?	I like ○○.
Who likes ○○?	I like ○○.
Why do you like ○○?	I have two reasons. First, ○○ is interesting. Second, ○○ is exciting.
From the beginning, please.	I like ○○. I have two reasons. First, ○○ is interesting. Second, ○○ is exciting. That's why I like ○○.

図4 問答ゲーム (英語バージョン)

力を要する活動を重視していかななくてはいけない。

4. おわりに

今回は新学習指導要領の改訂ともない、現在注目を集めている言語力を中心に、英語科における言語力を高める言語活動を中心とした授業づくりについて言及してきた。これらの活動は生徒の言語力(言語を運用するのに必要な能力)を高めるということを、日々の授業実践で確認してきている。

実践例1では1単語でも状況や心情をとらえることができ、「感情・情緒」や「他者とのコミュニケーション」という言語の果たす役割を意識した指導でもあり、言語力を高めるために有効であると考えられる。実践例2においては、言語の果たす役割の「知的活動」に関

する活動であり、2つの意見を交流すること、そしてそのように考えた理由を文章から読み取る活動を行うことで、生徒が自然と思考し、言語力の育成に寄与すると考える。最後の実践例3では、「言語技術」を活用して「知的活動」と「他者とのコミュニケーション」の両方に焦点をあてた指導になっている。「知的活動」に関することと言えば、的確に相手に伝えるために、どのような表現を使用すべきか学習することができ、そしてこのような学習を繰り返すことで自分の言いたいことを伝える力(自己表現力)を高めることができると考えている。特にこの活動は、大津(2009)が述べる「ことばを知っているだけではなく、ことばについて知っている」という力が身につくのではないかと考えている。単に「ことばを知っている」だけでは、状況

や心情、相手に適切な表現を常に使うことは難しい。「ことばについて知っている」力を身につけると、生徒自身はその状況や心情、相手を考慮してどのような表現を使うことが可能なか考えることができる。つまり、「ことばについて知っている」ということは、言語力を高めるために必要な力であることが言える。

今回提案した授業内容は、新学習指導要領で示されていた2種類の言語活動（「言語材料について理解したり練習したりする活動」と「実際に言語を使用して互いの考えや気持ちを伝え合う」）を結びつけた活動である。このように、これら2つの活動は別々のものではなく、授業の中で効果的につなげていくことが求められてくるのである。2種類の言語活動を使い分けるのではなく、2種類の言語活動をつなげていく視点をもって授業を構成していくことが大切である。

最後に授業づくりにおいて必要なことは、まずわれわれ教師が生徒の実態を正確に把握することである。そして、生徒たちに必要な能力は何なのか（実態把握）、どのような資質・能力を育てなければならないのか（目標・評価）、そのためにどのような活動が有効なのか（方法）を考えなければならない。生徒の言語力を高めるためには、まずわれわれ教師がクラスルームイングリッシュのように英語を率先して使用し言語環境を整え、それが面白いと生徒に伝わるような指導や活動を仕組むことが大切になってくると考える。

引用・参考文献

- ・ 深沢信吾「各教科・領域を通じた言語力の向上に関する研究－言語活動の充実により児童・生徒の

変容を促す指導にかかわるグループ研究の概要－」山梨県総合教育センター 2007

- ・ 門田修平『シャドーイングと音読の科学』コスモピア 2007
- ・ 甲斐陸朗「言語力を育成するとは」『新学習指導要領対応 言語力を育てる授業づくり』図書文化 2009
- ・ 柏崎秀子「言語力育成を目指すこれからの教育の探究－方策の分析に見る方向性と課題－」『実践女子大学文学部紀要』第52集
- ・ 平田 和人編『中学校 新学習指導要領の展開 外国語科英語編』明治図書 2008
- ・ 松村 健ほか「英語科における表現力を高めるためのライティング指導の在り方について－「言語技術」を活用した指導の実践を通して－」広島大学附属東雲中学校研究紀要『中学教育』第41集 pp85-91 2009
- ・ 直山木綿子「外国語科で育てる言語力」『新学習指導要領対応 言語力を育てる授業づくり』図書文化 2009
- ・ 大津由紀雄・窪蘭晴夫『ことばの力を育む』慶応義塾大学出版会 2008
- ・ 土屋澄男『英語コミュニケーションの基礎を作る音読指導』研究社 2004
- ・ 三森ゆりか『論理的に考える力を引き出す』一声社 2002
- ・ 三森ゆりか『外国語を身につけるための日本語レッスン』白水社 2003
- ・ 山崎学肖ほか「英語科における表現力を高めるための音読指導の在り方についてⅡ－「マインドマップ」と「創造的日本語表現」を用いた音読指導の工夫－」広島大学附属東雲中学校研究紀要『中学教育』第41集 pp77-84 2009